

田中将大投手の通訳・堀江慎吾さん来校

海外で新しい自分を発見しよう。

一月七日水曜日、本学D棟351教室で、第一回江戸川大学グローバルセミナーが開催された。ニューヨーク・ヤンキース田中将大投手の専属通訳 堀江慎吾さん、海老澤邦江教授、広岡勲准教授の三人が「海外で仕事をする」というテーマに約一時間半の対談を行った。(文:石原健太郎 写真:綿引桃花)



堀江さんは幼少期から、話すよりも英語で話す方が父親の仕事の都合で、アメリカで暮らす期間が長かった。また、スポーツ好きの母親の影響もあり、野球をはじめ、サッカーやバスケットボールなどスポーツが好きだった。その中で英語が染みついた。日本語を

話すよりも英語で話す方が楽になっていた。しかし、車を二千ドルで購入したもの、二週間後故障、やむなく修理費を払い、再出発しようとしたのだが、修理した車がまたも故障。お金が底をつきやむなく一度帰国した。帰国後はまたアメリカへ行くためにアルバイト生活を続け、再渡米をした。その実績を買われて

アメリカでは、スポーツドキュメンタリーに関わる仕事をしたかった。そこで、テレビのコーディネイト会社に就職した。日本のテレビ局がアメリカで撮影をする際にそれをサポートしたり、インタビューやスケジュールの管理をした。数年たつてからフリーランスとなる。すると、メジャーリーグのテレビディレクターとして取材をやってみないか、という話も

NHK BSのメジャーリーグ中継のディレクターのオファーを受けた。五年ほどディレクターを務めたのち、二〇一四年、田中将大投手の通訳の仕事が舞い込んだ。「ほんやりとしてもメジャーで働きたいというビジョンを持っていた。だからチャンスにとびつめた。」



上: 海外での生活を語る堀江さん。
中: 左から広岡先生、堀江さん、海老澤先生。
下: セミナー中に質問をする学生。

「新しい世界を見つけることで成長できる」と自分自身の力で視野を広げることが強調していた。しかし一方で、「出会った人、助けてくれた人が自分を作ってくれた」という。自ら行動しなければキャリアはつかめないが自分の力だけでは成功はなしえない、ということなのか。「人を大切にしなければと思った」と堀江さんは言葉を結んだ。

対談の最後には質問タイムがあった。アメリカのメディアに日本語を訳すときには、「直訳では伝えられないこともあるので、ニュアンスで伝える」ことが大切だということ。また、海外で仕事をするということについて、「新しい世界を見つけることで成長できる」と自分自身の力で視野を広げることが強調していた。しかし一方で、「出会った人、助けてくれた人が自分を作ってくれた」という。自ら行動しなければキャリアはつかめないが自分の力だけでは成功はなしえない、ということなのか。「人を大切にしなければと思った」と堀江さんは言葉を結んだ。

「ト」という。言葉の面だけではない。遠征試合の際は食事をついしょにしたり、生活のあらゆる面で不安が無いように気を遣う。田中将大投手には野球に専念してもらいたいからだ。これが堀江さんの流儀だ。



ニューヨーク・ヤンキースで田中将大投手の通訳として行動をとる日々をともにする日々のようす。